

第6章 旭川市におけるアイヌの人々の エスニック・アイデンティティ

新藤こずえ

上智大学総合人間科学部准教授

はじめに

本章では、アイヌの人々の意識をエスニック・アイデンティティの視点から検討することを目的とする。アイヌとして自分自身を意識することや、アイヌであることを自身のアイデンティティとしてどのように捉えているかといったことは、現代を生きるアイヌの人々の生活世界を理解するうえで欠かせない視点であると考えられる。エスニック・アイデンティティは、一般的には次のように説明されている。

人類学用語。民族集団への帰属意識、同類意識のこと。エスニシティを集団成員の主観的側面からとらえようとする概念で、エスニシティ研究の中心課題の一つ。文化的同化をこえて存続し、伝統文化の有無とは必ずしも関係しない。民族集団の成員は、集団の内部で自集団に対する「原初的愛着」を育成し、民族集団間の相互作用に基づいて、自集団の内側から他集団を区別する境界、エスニック・バウンダリー（境界）を形成する。これは空間的な境界領域ではなく意識的なものであり、民族集団の成員は多様な社会の状況に応じて、任意にかつ選択的に自己の同一化をはかるといえる。したがってエスニック・アイデンティティを考察する場合、歴史的背景や地域性、政治的状況を考慮に入れることが必要である（ブリタニカ国際大百科事典）。

本研究グループでは、これまでに道内各地でのインタビュー調査を実施するとともに、北海道アイヌ生活実態調査の結果をふまえ、アイヌの人々のエスニック・アイデンティティを世代、血筋、地域に着目しながら分析してきた。上山（2012）は、アイヌのエスニック・アイデンティティのパターンと分化要因を、世代、性別、アイヌ文化の経験、「純血性」、婚姻関係をもとに分析し、アイヌ文化の経験がエスニック・アイデンティティに肯定的な影響を与えていていることを明らかにしている。また、小内・長田（2012）、新藤（2013, 2014, 2015, 2016, 2018）は、過去—現在—今後（未来）において、アイヌであることについてもっている意識を「肯定的」「否定的」「どちらでもない」のいずれであると捉えているのか、という枠組みを用いて検討してきた。そこで得られた知見として次のものがあげられる。第1に、過去に否定的な意識をもっていた人はアイヌを取り巻く社会状況が変化するなかで、エスニック・アイデンティティも肯定的な方向に変化してきている。第2に、アイヌであることについて、否定的でも肯定的でもない意識をもつ人々が一貫して多数を占めているが地域によって差が大きい。自分がアイヌの血筋であることを知らない人々が存在しており、若い世代で顕著である。第3に、アイヌの血筋の「純血性」はエスニック・アイデンティティの方向性が肯定的にも否定的にもなる影響を与えていた。「血が濃い」ことは自分がアイ

ヌ文化を継承する立場としての正統性を説明する要因として位置づける一方で、「毛深い」などの身体的特徴に悩みを抱える者が少なくなかった。一方で「血が薄い」ことは「無意識化」の要素になっているもののアイヌ文化を実践しない理由にはなっていない。第4に、エスニック・アイデンティティをともなわないアイヌ文化の肯定化も進行している（新藤こずえ 2018）。ただ、こうした知見は、「アンケートやインタビューで表明されたエスニック・アイデンティティは、現代を生きる様々な背景や経験を経たアイヌの人々が、表出してもよいと戦略的に判断した表層にあたる部分にすぎないのかもしれない」（同上）という意味での限界を抱えていることも理解しておかねばならない。

旭川市におけるインタビュー協力者が14人であることから、本章においてもとりわけ上記のような限界をふまえつつ、これまでの研究成果と同様の観点から分析・検討を行うことにより、旭川市におけるアイヌの人々のエスニック・アイデンティティを明らかにする。

本調査は旭川市で実施したものであるが、これまでに同内容の調査を実施した札幌市・むかわ町、新ひだか町、伊達市、白糠町、帶広市の分析（小内・長田 2012; 新藤 2013, 2014, 2015; 新藤慶 2018）を適宜参照し、アイヌの人々のエスニック・アイデンティティについて検討する。なお、調査対象者のうち配偶者がアイヌである和人が含まれているが、その場合もアイヌの人々と同様の観点から分析する。本調査におけるインタビュー協力者14人のうち、3人が和人配偶者である。

第1節 旭川市におけるアイヌの人々のエスニック・アイデンティティ

第1項 過去・現在の意識の概要

まず、自身がアイヌであることについて、どのような意識をもっているのか、インタビュー協力者14人の語りの内容全体にもとづき、「過去」と「現在」の意識を「肯定的」「否定的」「どちらでもない（意識しない）」の3つの群に分類した。①「肯定的である」は、アイヌであることを誇りに思っている、アイヌの文化や伝統を積極的に実施しているという人々の意識である。②「否定的である」は、アイヌであることによって非常につらい経験をした、人に知られたくないなど、アイヌであることをネガティブにとらえている人々の意識である。③「どちらでもない」は、アイヌであることを意識しない、アイヌであることを知らなかったという人々と、肯定的な意識と否定的な意識の両方をもっているために、アイデンティティとしては「どちらでもない」という人々が含まれている。

結果としては、過去においては「どちらでもない」が14人のうち9人（64.3%）と半数以上を占め、「肯定的」が4人（28.6%）であるが、現在においては「肯定的」が9人（64.3%）、「どちらでもない」が5人（35.7%）となっており、過去と比べると「肯定的」な意識をもつ者が多い（表6-1）。「否定的」は過去の意識としてもっていた者が1人いるのみであった。

表6-1 アイヌであることに対する過去・現在の意識

単位：人、%

	肯定的		否定的		どちらでもない ／意識しない		その他		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
過去	4	28.6%	1	7.1%	9	64.3%	-	-	14	100.0%
現在	9	64.3%	0	0.0%	5	35.7%	-	-	14	100.0%

次に、過去から現在への変化をみてみよう。全体としては、過去に「どちらでもない」意識であった9人のうち、5人が現在は「肯定的」な意識に変化している。一方で、過去も現在も「肯定的」である者が4人、過去も現在も「どちらでもない」という意識の者が4人、過去は「否定的」であったが、現在は「どちらでもない」者が1人である（表6-2）。次節ではエスニック・アイデンティティがどのように変容したのか、あるいはしなかったのかを具体的な語りから検討してみよう。

表6-2 アイヌであることに対する過去と現在の意識

単位：人

世代	現在											
	肯定的である			否定的である			どちらでもない					
過去	青年層 (1人)	肯定的	1	1	肯定的	0	0	肯定的	0	0	肯定的	0
		否定的	0		否定的	0		否定的	0		否定的	0
		どちらでもない	0		どちらでもない	0		どちらでもない	0		どちらでもない	0
	壮年層 (3人)	肯定的	1	2	肯定的	0	0	肯定的	0	1	肯定的	0
		否定的	0		否定的	0		否定的	0		否定的	1
		どちらでもない	1		どちらでもない	0		どちらでもない	0		どちらでもない	1
	老年層 (10人)	肯定的	2	6	肯定的	0	0	肯定的	0	4	肯定的	0
		否定的	0		否定的	0		否定的	0		否定的	1
		どちらでもない	4		どちらでもない	0		どちらでもない	0		どちらでもない	3
合計 (14人)	肯定的	4	9	肯定的	0	0	肯定的	0	5	肯定的	0	
	否定的	0		否定的	0		否定的	0		否定的	1	
	どちらでもない	5		どちらでもない	0		どちらでもない	0		どちらでもない	4	

第2項 肯定的なエスニック・アイデンティティ

まず、現在の意識が「肯定的」である9人のうち、過去から現在に至るまで「肯定的」な意識を持っている4人の語りをみていこう。

（過去も現在も「肯定的」である者）

- ・アイヌでよかったです、アイヌってすばらしいなと思っている。アイヌにはこれだけすばらしい手仕事や文化があり、とても誇らしいことだと思う。（老年層・女性）
- ・両親からアイヌの血筋だと告げられることやアイヌ文化を伝承されたことはないが、両親とも木彫りをしていたので、つねに身近にあり、仕事も自然に覚えた。父親は熊彫りで、母親はアクセサリーも作っていた（中略）（現在も）アイヌのことに携わっているので、つねにアイヌの一員として意識している。刺繍から彫り物から、身近にあるものがアイヌのものばかりで、作ることも多い。（老年層・女性）
- ・生まれたときからアイヌの行事、活動には一緒に連れて行ってもらっていたが、小さい頃はアイヌの血が流れていると感じてはいなかった。小学校に上がり、社会科の授業でアイヌについて勉強した時にアイヌであるということに気がついた。父親は熱心にアイヌに関わる活動をしていたし、母親もアイヌの血は流れていないが、アイヌの活動に参加していた。（青年層・男性）

- ・父親の影響で、小さい頃から踊りを踊ったり、筐作りをしたりする活動に参加してきていて、最近、（自身が）30代になってから、父親に旭川には若者がいないので、アイヌの文化を伝承してほしいと言われるようになった。小さい頃から踊りをしたりしていたので、伝承していくのは当たり前のように感じている。（青年層・男性）
- ・生まれた時からずっとアイヌの環境で育ち、子守の踊りなどを舞台に立って踊りおひねりを貢っていた。アイヌであると自覚したきっかけはなく、アイヌに生まれたからアイヌだと思っている。（老年層・女性）
- ・変な顔で見られたり、陰でこそそ言われたりするのは嫌なので、「私ね、アイヌなんだよ」と言う。そうすると「へえ～、だからまつげ長いの」と言われ、それからはもう悪口を一切言わなくなる。先に言うと「綺麗ですね」と言われるので、「そうでしょう」と言う。（老年層・女性）
- ・職業訓練校でも職場でも、自分からアイヌだと言っていて、隠そうという気持ちはまったくない。周りも皆知っているが、嫌な思いをしたことはない。（壮年層・男性）

このように、過去も現在もアイヌとしての意識が肯定的である者は、アイヌの文化に関わる活動を幼少期から経験し、現在も継続している人々である。こうした人々は子ども期にアイヌ文化活動を活発に行っている家族が身近におり、それらの活動の様子と一緒に体験している。現在においては、「旭川チカップニアイヌ民族文化保存会」のメンバーとしての活動（青年層・男性、老年層・女性）や、刺繡、踊り、ゴザ編み、サラニプというカゴ作りのほか、アイヌの伝統料理やユーカラを教えるなどの活動も行っている（老年層・女性）。エスニック・アイデンティティが肯定的であることと、こうしたアイヌ文化の担い手としての活動をしていることは関係しているといえよう。加えて、「父方祖母曾祖父母はすべてアイヌの血筋」（青年期・男性）や「トゥスクルをする人としては、父方祖父がそういう何かみられる人だったようだ」（老年層・女性）というように、アイヌとしての血筋の濃さやアイヌの人々のなかでも特別な役割を担っていた者が先祖にいるということも、肯定的な意識を持つことにつながっている。

次に、過去は「どちらでもない」意識であったが現在は「肯定的」である者5人の語りをみていく。

（過去は「どちらでもない」意識であったが現在は「肯定的」である者）

- ・母親が木彫りをして、お箸を作ったりしていただけで、母親の兄弟はすでに亡くなっており、家族で日常的に何かアイヌ文化に関わるということはなかった。伯父（母の兄）も生きていた時は熊を彫って生活していた。アイヌの行事にはいっさい参加したことはなかった。（壮年層・女性）
- ・（旭川アイヌ協会への入会がきっかけで踊りを練習しムックリも弾けるようになった。それを他地域のアイヌ文化の伝承者と職場のイベントで披露したところ）「○○さん、そういうことができるの」と言われ、会社のなかで有名になった。みんな「すごい、すごい」と喜んでくれて、「是非もう1回やってくれ」ということになり、2回目の披露をする機会があった。（自分は）子どもの頃は人見知りだったが（中略）別に誰の前へ行っても恥ずかしいと思うこともなくなった。会社の人も「仕事もちゃんとやっていて子育てもしていて、仕事も出来て」みたいな感じで見てくれるようになった。（壮年層・女性）

- ・ 小さい部落でアイヌの人がまわりにたくさんいて、アイヌであることが嫌だとも何とも思わないで育っていたので、自分がアイヌということがわかつても全然変わりはなかった。アイヌ民族のひとりであると自覚するようになったきっかけは、母親の仕事（アイヌ民芸品店での刺繡製品の制作・販売）を手伝うようになったことになる。（老年層・女性）
- ・ 市の仕事として、一般の人に（アイヌ）刺繡を教えるようになった。（中略）刺繡を教えていりし、刺繡でも食べるものでも何でも母親がやってきたことを何となく継いで、似たようなことをやっているので、アイヌであると意識する。（中略）アイヌ民族をなくしたくない。（老年層・女性）
- ・ （父親は祖父母の代からやっていた木彫りを仕事としアイヌの行事に参加していた）アイヌであると意識はしているが、別に気にしないで生きてきた。自身は差別を受けてきていないが、他の人たちが差別を受けている時に、（自分も）アイヌだから、アイヌであると意識する。（老年層・男性）
- ・ （現在は）儀式の時にイナウを削ったり、飾ったりしている。（旭川アイヌ協議会の）行事がある時に一生懸命にする。自分の家のお墓の墓標を作って新しく建て替えている。（老年層・男性）

過去に「どちらでもない」意識であった者の家は、親が木彫りや刺繡で生計を立てていることやアイヌの行事に参加していたこと、周囲のアイヌの人々が差別を受けていたことから、自分がアイヌであるということを意識していた。しかし、そのことが自身のエスニック・アイデンティティを肯定的あるいは否定的にすることにはつながっていなかった。その後、踊りやムックリを多くの人の前で披露して「すごい」と評価されたことが大きなきっかけとなり、「別に誰の前へ行っても恥ずかしいと思うこともなくなった」と述べている。また、アイヌ文様の刺繡を制作・販売したり、一般の人に教えるという経験を通じて、継承すべきものとして自身の技術を捉えることによりアイヌとしての肯定的なアイデンティティが培われていると考えられる。アイヌ協議会の行事を一生懸命にすることや、墓標をアイヌの伝統的な方法で建て替えることは、エスニック・アイデンティティが肯定的であることを表しているのではないだろうか。

- ・ アイヌであると自覚するきっかけは、妻と結婚して、チセの建て方を教わるようになったことになる。（中略）チセの建て方を習得することでアイヌの人たちに受け入れられ、技術をもつようになると信頼も得られた。（老年層・男性・和人配偶者）
- ・ 旭川に来て初めて、そして結婚してからアイヌということがわかった。夫と会った時はアイヌということはなんとなく分かった。夫も隠すようなことはなかったし、アイヌということにいい意味で先入観もなく出会ってうまくいった。（中略）結婚して何年かそういうことに携わってきて、嫌な感じではなく、「ああ凄いな」と感じて、感動した。興味があったのだと思う。（老年層・女性・和人配偶者）

和人配偶者については、アイヌの伝統的な家屋であるチセづくりに携わることや、アイヌの着物を着てイベントに出るということが行われていた。こうした活動はアイヌの人々から信頼を得

ることやアイヌ文化を継承するための「活動を支える側になっている」という意識の醸成になり、自分が「アイヌであると自覚する」ことにつながっているといえよう。

第3項 「どちらでもない」エスニック・アイデンティティ

次に、現在の意識が「どちらでもない」人々の意識についてみていく。現在、「どちらでもない」意識であると考えられる5人のうち4人は過去においても「どちらでもない」意識であった者であり、そのうち1人は和人配偶者である。その他の1人は過去においては「否定的」な意識であった者である。

(過去も現在も「どちらでもない」意識である者)

- ・ 自分にアイヌの血が入っていることはわかっているが、ただそれだけのこと。（老年層・女性）
- ・ アイヌについては何も知らないから、アイヌであってアイヌではない。アイヌだと言われると「あらそうかな」と思うだけで、自分では何も分からぬ。アイヌのことについて何か聞かれたら、「私はアイヌでないから、あの人に聞いて」と言う。「私はアイヌかもしれないけど、アイヌでない、知らない」と言うので、「アイヌ、アイヌの顔してて、そんなこと言ったら変だよね」と言われたことがある。アイヌの血筋ではあるが、自分ではアイヌだと思っていない。（老年層・女性）
- ・ （アイヌの踊りも歌も全部できるが）私はいまだに言えないですよ。（アイヌだということをですか。カミングアウトというか）しないですね。ほんとに限られた人間だけですね。（中略）それもやっぱり自分のなかでは成功、ある意味成功してからではないと絶対言えることはないと思ったんですよ。私を知ってもらって、私をわかってもらうまでは言えない。というのが私のなかでルールで決めていること。（中略）「アイヌです」と言っても「アイヌって」。となるじゃないですか。だって100パーセントじゃないし。（壮年層・女性）
- ・ 自身は和人なので、アイヌとして意識はしていないが、アイヌのことはずっと関わってきている。特にアイヌ、和人というふうに考えたことはなく、人種についてはまったく違和感がなく生活してきている。（老年層・女性・和人配偶者）

上記のうち、老年層の女性（3人）のエスニック・アイデンティティは、ほとんどあるいはまったくアイヌであることを意識しないので、肯定的でも否定的でもないという意味での「どちらでもない」という語りであるが、壮年層の女性（1人）の語りは、肯定的でも否定的でもあるという意味で「どちらでもない」というふうに捉えることができる。つまり、幼少期からアイヌの踊りや歌などの文化に親しんできており、現在もアイヌ文化活動に取り組んでいるものの、自身がアイヌであるということは、「ほんとに限られた人間だけ」にしか「いまだに言えない」こととして位置づけられている。また、アイヌの血筋が「100パーセントじゃない」ということも加えて述べられている。一方で、差別されるのではないかというリスクも肯定的に捉えきれない背景にある。「踊りは好きだからやりたいけど、写真を撮られるから嫌だ」が、「新聞もそうだし、テレビもそうだけど、もっともっとアイヌ民族のことを取り上げてほしい」（壮年層・女性）という気持ちをもっている。つまり、自分自身がアイヌとして露出することは避けたいけれども、人々に理解されるため

にアイヌの人々がマスコミなどに取り上げられることは希望するというアンビバレン特な状況もみられる。

(過去は否定的であったが、現在は「どちらでもない」意識である者) (老年層・男性)

- ・ アイヌだと意識するのはバカにされた時ぐらい。子どもの頃から「アイヌのくせに」というのはある。
- ・ 恋愛や結婚する際に差別された経験はあった。
- ・ (請負制の職場で) 最初のうちは頑張れば頑張っただけの収入もあり楽しくやっていたが、そのうち自分たちより働いていないはずの人たちの収入のほうが多いことがわかった。その会社の社長が勘違いしていて、アイヌは国から補助を受けているからということで、自分を含め4人のアイヌの給料を下げたことがわかり、4人全員でその仕事を辞めた。
- ・ (自身の) 子どもたちの友だちを見ていてもバカにされることではなく、(自身の) 時代とは違う。むしろ「カッコいい」とか「うらやましい」という感じがある。
- ・ 息子には色々ある文化のひとつの文化としてアイヌ文化を残すのも必要だし、知識を身につけておくように言っている。

この男性は、結婚、仕事の場面でアイヌであることを理由に差別を経験している。自身が交際していた女性の親に会ったとき、アイヌであることを理由に「悪いけど身を引いてくれ」と言われ、「暴言を吐いて別れた」という。また、職場でも不当に給料を下げられ退職している。子ども期には、和人養子である父親が「周りの人には『アイヌ』と言われ、部落の人には『もらいつ子』と言われ、両方からバカにされて大変だったと思う」という印象をもっており、自分がアイヌであることについては否定的なアイデンティティをもたざるを得ない状況があった。しかし、現在は、自身や子どもがバカにされることなく、むしろルックスが「(娘は) 目が大きくて可愛い」ということや、息子の進学にあたってアイヌであることがプラスに働いたという経験から、自分がアイヌであることに対する否定的な感情やこだわりは薄らいでいるように見える。

第2節 道内の他地域との共通点と違い

本節では、これまでに本研究グループが調査を行った地域において、比較可能なデータがある札幌市・むかわ町、新ひだか町、伊達市、白糠町の調査結果をふまえ、旭川市の特徴を検討する。ただし、調査データを比較するにあたって、他地域で実施されたインタビュー調査に比較すると、旭川市で得られたデータ数(14人)が他地域で得られたデータの平均値(52.8人)の26.5%にとどまるることを理解しておかねばならない。また、旭川市では青年層のインタビュー協力者が1人であり、年齢層別の比較は難しいため、主としてアイヌであることに対する意識の過去一現在一今後について検討する。

まず、アイヌであることに対する過去の意識を地域別にまとめたものが表6-3である。旭川は「肯定的」な意識をもつ者の割合がもっとも高く、「否定的」な意識をもつ者がもっとも低い。「どちらでもない」意識をもつ者は全体の平均とあまり変わらない。次に、現在の意識を見てみると、こちらも過去の意識と同様、他の地域と比べると旭川は「肯定的」である意識の者が

もっとも多い。否定的な意識である者はおらず、「どちらでもない」意識の者も他地域と比べるともっとも少なくなっている（表6-4）。このことは、旭川市という道内では札幌市に次ぐ大きなまちでありながらもインタビュー協力者が少ないという状況のなかで、アイヌとしてのエスニック・アイデンティティが肯定的である者だけが協力したことがあるかもしれない。したがって、旭川のアイヌの人々が他の地域に比べて全般的に肯定的な意識をもっているとは必ずしもいえないであろう。

こうしたサンプルの限界をふまえつつも、表6-5では、現在の意識と過去の意識の差に着目して変化をみている。その結果、旭川は他の地域に比べて過去に「どちらでもない」という意識であった者が「肯定的」な意識に変化した割合が高いということがわかる。「どちらでもない」意識から変化した者の割合はもっとも高いが、「肯定的」に変化した者は35.7%であり、白糠（45.8%）、新ひだか（36.8%）に次いで多い。

今後の意識についてまとめたものが表6-6である。「あなたは今後、どのように生活していきたいと考えていますか」という問い合わせに対しては、他地域に比べて「どちらでもない」意識の者がもっとも少なく、積極的な意識をもつ者が札幌（64.7%）に次いで多かった。

表6-3 アイヌであることに対する過去の意識（地域別）

単位：人、%

	肯定的である		否定的である		どちらでもない		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
旭川	4	28.6%	1	7.1%	9	64.3%	14	100.0%
札幌	7	13.7%	17	33.3%	27	52.9%	51	100.0%
伊達	6	12.8%	4	8.5%	37	78.7%	47	100.0%
むかわ	5	8.2%	16	26.2%	40	65.6%	61	100.0%
新ひだか	7	12.3%	33	57.9%	17	29.8%	57	100.0%
白糠	5	10.4%	12	25.0%	31	64.6%	48	100.0%
全体	34	12.2%	83	29.9%	161	57.9%	278	100.0%

資料：インタビュー調査（2009～2018年）結果より作成

表6-4 アイヌであることに対する現在の意識（地域別）

単位：人、%

	肯定的である		否定的である		どちらでもない		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
旭川	9	64.3%	0	0.0%	5	35.7%	14	100.0%
札幌	23	45.1%	4	7.8%	24	47.1%	51	100.0%
伊達	7	14.9%	1	2.1%	39	83.0%	47	100.0%
むかわ	22	36.0%	3	5.0%	36	59.0%	61	100.0%
新ひだか	28	49.1%	1	1.8%	28	49.1%	57	100.0%
白糠	27	56.3%	1	2.1%	20	41.7%	48	100.0%
全体	116	41.7%	10	3.6%	152	54.7%	278	100.0%

資料：インタビュー調査（2009～2018年）結果より作成

表6-5 アイヌであることに対する現在の意識と過去の意識の差（全体・地域別）

(差) = (現在の意識) - (過去の意識) 単位：人、%

	肯定的である		否定的である		どちらでもない		回答者 全体
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	
旭川	5	35.7%	-1	-7.1%	-4	-28.6%	14
札幌	16	31.4%	-13	-25.5%	-3	-5.9%	51
伊達	1	2.1%	-3	-6.4%	-2	-4.3%	47
むかわ	17	27.9%	-13	-21.3%	-4	-6.6%	61
新ひだか	21	36.8%	-32	-56.1%	-11	-19.3%	57
白糠	22	45.8%	-11	-22.9%	-11	-22.9%	48
全体	82	29.5%	-73	-26.3%	-9	-3.2%	278

資料：インタビュー調査（2009～2018年）結果より作成

表6-6 アイヌであることに対する今後の意識（地域別）

単位：人、%

	積極的		消極的		どちらでもない※		その他		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
旭川	8	57.1%	0	0.0%	4	28.6%	2	14.3%	14	100.0%
札幌	33	64.7%	1	2.0%	17	33.3%	0	0.0%	51	100.0%
伊達	7	14.9%	0	0.0%	39	83.0%	1	2.1%	47	100.0%
むかわ	34	55.7%	3	4.9%	24	39.3%	0	0.0%	61	100.0%
新ひだか	21	36.8%	1	1.8%	29	50.9%	6	10.5%	57	100.0%
白糠	20	41.7%	0	0.0%	25	52.1%	3	6.3%	48	100.0%
全体	123	44.2%	5	1.8%	138	49.6%	10	3.6%	278	100.0%

資料：インタビュー調査（2009～2018年）結果より作成

※旭川のみ「アイヌであることを意識するが、アイヌとしての生活を送るつもりはない」と「アイヌであることは意識せず、アイヌとしての生活を送るつもりはない」を含めて「どちらでもない」とした。

(参考) 設問 あなたは今後、どのように生活していきたいと考えていますか

旭川以外	旭川
ア. アイヌとして積極的に生きていきたい	ア、アイヌであることを意識し、アイヌとしての生活を送りたい。
イ. 特に民族は意識せず生活したい	イ、アイヌであることを意識するが、アイヌとしての生活を送るつもりはない。
ウ. 極力アイヌであることを知られずに生活したい	ウ、アイヌであることは意識せず、アイヌとしての生活を送るつもりはない。
エ. その他	エ、極力アイヌであることを知られずに生活したい。 オ、その他

第3節 加入団体とエスニック・アイデンティティ

旭川には、アイヌの人々が加入する団体として、旭川アイヌ協議会と旭川アイヌ協会がある。旭川アイヌ協会は道内各地区にある北海道アイヌ協会のうち上川地区にある協会のひとつであり、旭川アイヌ協議会は旭川市で独自に立ち上げられた団体である。また、旭川におけるアイヌ文化活動において大きな役割を占めている旭川チカッピニアイヌ民族文化保存会の会長は旭川アイヌ協議会の会長でもある川村兼一氏が務めている。以下、旭川アイヌ協議会は「協議会」、旭川アイヌ協会は「協会」、旭川チカッピニアイヌ民族文化保存会は「保存会」と記載する。

まず、14人のインタビュー協力者のうち「協会」会員は5人であった（そのほか元会員4人、未加入者5人）。「協議会」会員は6人であった（そのほか元会員2人、未加入者6人）。また、「保存会」会員は6人であり、そのうち4人は「協議会」会員でもあった。逆に「保存会」会員の「協会」現会員はいなかった。調査時点でいずれの団体にも加入していない者は1人だった（図6-1）。現在のエスニック・アイデンティティの意識と加入団体をまとめたものが表6-7、今後の意識と加入団体をまとめたものが表6-8である。現在の意識では、「保存会」の会員は肯定的な意識をもつ者が多くなっている（83.3%）、今後の意識も含めて、サンプル数が少ないので何ともいえないところがあるため、加入団体での活動との関わりがあると考えられるエスニック・アイデンティティについて、具体的な語りをみていく。

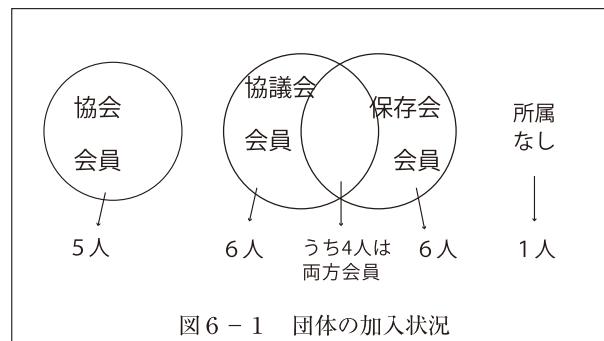


図6-1 団体の加入状況

表6-7 加入団体と現在のエスニック・アイデンティティの意識（加入団体は複数回答有） 単位：人、%

	肯定的		否定的		どちらでもない ／意識しない		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
現在	9	64.3%	0	0.0%	5	35.7%	14	100.0%
旭川アイヌ協会	3	60.0%	0	0.0%	2	40.0%	5	100.0%
旭川アイヌ協議会	4	66.7%	0	0.0%	2	33.3%	6	100.0%
協議会+保存会※	3	75.0%	0	0.0%	1	25.0%	4	100.0%
協議会のみ	1	50.0%	0	0.0%	1	50.0%	2	100.0%
旭川チカッピニアイヌ文化保存会	5	83.3%	0	0.0%	1	16.7%	6	100.0%
保存会のみ	2	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	100.0%
加入なし	0	0.0%	0	0.0%	1	100.0%	1	100.0%

※「協議会+保存会」は両方に加入している者

表6-8 加入団体と今後のエスニック・アイデンティティの意識（加入団体は複数回答有） 単位：人、%

	肯定的／積極的		否定的／消極的		どちらでもない／意識しない		その他		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比		
今後	8	57.1%	0	0.0%	4	28.6%	2	14.3%	14	100.0%
旭川アイヌ協会	3	75.0%	0	0.0%	1	25.0%	1	25.0%	5	100.0%
旭川アイヌ協議会	3	50.0%	0	0.0%	3	50.0%	0	0.0%	6	100.0%
協議会+保存会※	2	50.0%	0	0.0%	2	50.0%	0	0.0%	4	100.0%
協議会のみ	1	50.0%	0	0.0%	1	50.0%	0	0.0%	2	100.0%
旭川チカッピニアイヌ文化保存会	4	66.7%	0	0.0%	2	33.3%	0	0.0%	6	100.0%
保存会のみ	2	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	100.0%
加入なし	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	100.0%	1	100.0%

※「協議会+保存会」は両方に加入している者

(保存会と協議会の両方会員)

- 保存会で団体としてみんな一緒に行動している。個人では行動していない。旭川には他に文化保存会はない。保存会では青年部となっているが、みんな年寄りになってしまって、若い人は（2人）しかいない。青年部と名前はついているが、ほとんどが70、80代になってしまった。（老年層・男性）
- 保存会の活動には参加し、踊りをしている。旭川アイヌの踊りには旭川アイヌの特徴がある。他の地域と比べるとけっこう違いがあり、儀式自体の名前は同じでもその内容である踊りが全然違ったりする。保存会がなくならないように、協力、フォローはしていきたい。（青年層・男性）
- （保存会の活動を）ずっと続けてきている。若い時から活動を支える側になっている（中略）保存会の浮き沈みについては、観光客が少なくなったので、右下がりになっている。観光客が来ると川村（カ子トアイヌ）記念館で踊ることはある。観光客に見せるために頼まれて、女性の場合は年に7～8回くらい踊る機会はあると思う。観光客が減ってきてるので、踊る回数も減ってきてている。（老年層・男性・和人配偶者）

(保存会のみ会員)

- 保存会のメンバーにはなっている。窓口が（川村カ子ト）アイヌ記念館になっているので、アイヌ記念館に仕事が入ると、誰が何人ということで最低8～9人は集まって踊りに行く。（アイヌの伝統工芸を）作っているところの実演なども頼まれればやっている。（老年層・女性）

これらの語りから推測されることは、保存会のおもな活動は、アイヌの伝統舞踊であり、それは依頼されて（仕事として）披露されるもの、ということである。もちろん、披露するためには練習をしなければならないし、他地域とは異なる「旭川アイヌの踊り」を保存し受け継ぐという

意識ももたねばならない。つまり、アイヌ伝統舞踊を保存することは自分たちの役目であるということが、アイヌとしてのエスニック・アイデンティティを肯定的に捉えることにつながっているのではないだろうか。同時に、頼まれて披露するということは、保存会のみの会員の語りにみられるように踊りの披露は窓口（川村カ子トアイヌ記念館）を通じたオファーに応じてなされるものであり、「仕事」として位置づけられているという側面があった。だからこそ練習が必要であり、そのことによって「旭川アイヌの特徴」が保存会のなかで受け継がれていくという循環がなされているのではないだろうか。

なお、保存会の活動に参加しているものの、「どちらでもない」という意識の者は1人のみであった。保存会の活動内容というよりは、保存会での活動を通して海外のいろいろな国に行ったという語りが見られた（壮年層・女性）。次に協会会員、協議会会員、いずれの会員でもない人々の語りをみていく。

（協会会員）

- ・娘が高校に入る時にアイヌ協会に入り、就学支援を受けてお世話になったことはあるかもしれないが、そういうことで協会に入ったわけではない。子どもの就学資金のためにアイヌ協会に入り、終わると辞めて行くという人を今まで何人も見てきた。（中略）きっかけは就学資金だったかもしれないけれど、だんだん関わっているうちに自分でも何か（アイヌ文化に関わる活動を）できるという考えになった。（壮年層・女性）

（協議会のみ会員）

- ・アイヌ協議会に多分加入しているが、いつ加入したかわからない。（自身が）入会しようと思ったわけではないので、母親が加入する時に一緒に入ったのだと思う。妻も入っている。以前は母親も（自身も）アイヌ協会に入っていたが、アイヌ協会を辞めて協議会に入った。（壮年層・男性）
- ・30歳ぐらいの頃、アイヌ協議会に家の近くに住んでいる人に勧められて入会した。夫の名前で世帯名義で加入している。年会費は2,000円。ただ最近は払っていないかもしれない。（老年層・女性）

（いずれにも入っていない）

- ・今は全然関わっていない。何もしていない。アイヌ協議会には参加していない。旭川アイヌ協会には夫と結婚した時に入り、1人になってからもしばらく加入していた。それで木彫りや刺繡の教室に通わせてもらった。7～8年くらい前までは入っていた。アイヌ協会を辞めてからも（協会会員の）○○さんには友だちでいてもらっていてありがたい。○○さんは自分より年下だが、たくさんの知恵をもっている。（老年層・女性・和人配偶者）

このように、協会加入については、「就学支援」を受けるために加入したことがきっかけだが自分も何らかのアイヌ文化に関わる活動ができるという意識になったことが語られていた。一方で、協議会のみ会員の加入については、親が入っているため、近所の人に勧められてといったも

のであったが、あまり積極的な語りはみられなかった。「協会と協議会の両方に入っていることはない」（老年層・男性、協議会と保存会の両方会員）という語りにみられるように、調査時点では、他の人々も協会と協議会のどちらかに加入し、両方に加入することはないようである。

その理由としては、現在、協議会に加入している人のなかには、「以前は子どもの就学支援はアイヌ協会に入らなければ受けられなかつたが、今は協議会でも資金は借りることができるようになった。息子夫婦たちは奨学金を借りた」（老年層・男性、協議会のみ会員）というように、貸付事業を利用できるメリットが協会でなくとも協議会でも得られるようになり、協会を辞めたという語りがみられる。

- ・ 親が入っているため、親の手伝いをしながら自然に入った。夫婦で加入しているので、世帯名義になる（中略）アイヌ協会には妻が職業訓練的な刺繡教室に入るために加入したことがあった。アイヌ協会に加入しなければ刺繡の講習会を受講できなかつたので、その時期妻はアイヌ協会と協議会の両方に入っていた。講習会が終わった時にアイヌ協会は辞めた。（老年層・男性、協議会と保存会の両方会員）

これまでの他地域での調査において、新藤（2013）はアイヌの人々の協会の加入動機を2つに整理した。ひとつは、協会が主催するアイヌの伝統文化に関連する行事などに関わることを通してアイヌ文化の保存・伝承・発展に寄与する機会を得るという動機での加入であり、ふたつめは、教育費の貸付や住宅資金の貸付など、協会に加入することによって制度が利用しやすくなるというメリットがあるからである。この知見は新藤（2014）でも確認されている。いずれの動機であったとしても、アイヌ文化を経験することにつながり、肯定的なエスニック・アイデンティティの醸成に寄与することが示唆されている。しかし、旭川においてアイヌ文化継承活動を中心的に担っている保存会の会員は協会の会員ではないため、これまでに他地域で得られた知見のうち、ひとつめの役割については協会ではなく保存会が担っているということになる。ふたつめの就学支援や貸付事業がエスニック・アイデンティティに影響を与えるのか、ということについては、そういった制度利用がアイヌであることを表面化する契機になる場合は、影響を与えることがこれまでの研究では明らかにされてきた（新藤 2014）。しかし、旭川では、子どもの進学資金を貸付事業で借りた経験者から次のような語りもみられた。

- ・ （協会を通じて借りたお金を）払わなくていい（返さなくてもいい）と考える人が何人かいいるが、そういう人とは自然につきあわなくなる。そういう人とは同じように見られたくないという気持ちが働き、言い方は悪いが、「アイヌがアイヌを差別する」という言葉も聞いたことがある。返さない人の子どもと（自分の子どもを）一緒にされたくないという気持ちがある。返さないということについては根性が知れない。（老年層・男性、協会会員）

貸付制度を利用する事がエスニック・アイデンティティに影響を与えるというよりは、こうした制度を利用するアイヌの人々のなかに借りたお金を返さなくていいと考える人々がおり、同じアイヌであったとしても、そうした人々とは自分や自分の子どもは違うという意識である。も

もちろん、様々な事情で借りたお金が返せないということはあるだろう。今日、進学にあたって借りた奨学金が返せない人々が増えていることはアイヌの人々以外にもみられる現象であり社会問題にもなっている¹⁾。それは意識の問題というよりも奨学金制度の問題であり労働市場の問題、教育費の問題である。しかし、「アイヌがアイヌを差別する」という表現にみられるように、自身はアイヌであるけれどもお金を返さないアイヌの人とは違うという強い意識をもっている。「（子どもが大学に）進学するため奨学金を借りる目的で協会に入った」（老年層・男性）というように、協会への加入動機がストレートに語られている一方で、こうした人々と「就学支援を受けてお世話になったことはあるかもしれないが、そういうことで協会に入ったわけではない」（壮年層・女性）という人々との分断を作り出している。

第4節 エスニック・アイデンティティの今後

本調査では今後の生き方に関する意識について下記の5つの選択肢を用いて尋ねている。

- ア、アイヌであることを意識し、アイヌとしての生活を送りたい。
 イ、アイヌであることを意識するが、アイヌとしての生活を送るつもりはない。
 ウ、アイヌであることは意識せず、アイヌとしての生活を送るつもりはない。
 エ、極力アイヌであることを知られずに生活したい。
 オ、その他

アを肯定的／積極的、イを肯定的／消極的、ウを無意識／消極的、エを否定的／消極的という意識として捉え、その結果をまとめたものが表6-9である。以降では具体的な語りをみていく。

表6-9 今後のエスニック・アイデンティティの意識

単位：人、%

	肯定的／積極的		肯定的／消極的		無意識／消極的		否定的／消極的		その他		合計
	ア、アイヌであることを意識し、アイヌとしての生活を送りたい		イ、アイヌであることを意識するが、アイヌとしての生活を送るつもりはない		ウ、アイヌであることは意識せず、アイヌとしての生活を送るつもりはない		エ、極力アイヌであることを知られずに生活したい		オ、その他		合計
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数
今後	9	64.3%	1	7.1%	3	21.4%	0	0.0%	1	7.1%	14
											100.0%

(肯定的／積極的)

- ・ アイヌ文化を絶やすことなく継承していきたい。下の世代にもっと伝えて、活動に参加する人数を増やしたい。（青年層・男性）
- ・ 刺繡にしてもアイヌのことだし、お墓に入るにしてもアイヌの墓地になる。（中略）継承の問

題が大きい。女の子を産んでおけばよかったと思う。刺繡についても受け継いでくれるということがあれば引退という言葉もでないと思う。アイヌ民族をなくしたくない。（老年層・女性）

- ・長年一緒に共同体（協議会や保存会での活動）でやってきているからそういう（アイヌであることを意識し、アイヌとしての生活を送りたいという）気持ちはある。（老年層・男性・和人配偶者）
- ・アイヌであることは意識している。別に隠すこともない。そして普通の生活を送る。夫がアイヌだったので、アイヌ文化には触れて関心もあったので、そういうことを忘れないで大事にしながら生きていきたい。（老年層・女性・和人配偶者）
- ・○○さん（アイヌ文化伝承者の女性）との関わりが自分も（アイヌ文化に携わることが）できるというふうに考えるきっかけになった。（老年層・女性）
- ・祖母から伝えられたことを妻や娘が積極的にがんばってやっていることがすごいと思っている。娘はまだ10歳なので、祖母から聞いたことを伝えるということはないが、そのうちあるかもしれない。（妻は（アイヌ関係の）イベントなどにも子どもたちを連れて出かけている。生活館でアイヌ語教室をやっていた時には妻は長女を連れて行っていた）（壮年層・男性）

このように、「アイヌであることを意識し、アイヌとしての生活を送りたい」という人々は、現在の自分自身の活動がアイヌ文化の継承になるという意識をもっている。刺繡や「お墓に入るにしてもアイヌの墓地になる」という自分自身の活動のみならず、アイヌ文化を「下の世代にもっと伝え」るという意識は、アイヌ関係のイベントやアイヌ語教室に子どもを連れていくという個人的に具体的な行動がともなう活動や、「共同体（協議会や保存会での活動）でやってきている」というアイヌの人々との共同での活動につながっている。

- ・アイヌであることを意識していかなければならぬだろうし、アイヌのこともやっていく。具体的には刺繡をしたり、お箸を作ったりすることになる。自分が習ったことを残して行きたい。たいした事ではなく、みんながやっていることだが、必要だと思う。自分は大々的にアピールしているわけではない。暇があったらやっているだけ、習いたい人がいれば教えてあげるだけ、それがアイヌの仕事として残っていってくれれば良いと思う。（老年層・女性）
- ・それしか生きる道がない。年をとっても手作業が出来て、片言のアイヌ語でも聞かれれば勉強して教え、多少なりともお小遣いをもらえる。70歳になっても80歳になっても、それが1つの仕事になるかなと思う。（老年層・女性）

このように、「刺繡」「手作業」「アイヌ語」などのアイヌとしての文化活動が「仕事」になることによって、現在の生活に「多少なりともお小遣いをもらえる」という実際的にプラスの影響をもたらし、「70歳になっても80歳になっても、それが1つの仕事になる」ことや、将来的には自分自身の次の世代の人々に「アイヌの仕事として残っていってくれれば」という思いをもついている。しかし、そういった取り組みは、「大々的にアピール」するものではなく、「暇があったらやっているだけ、習いたい人がいれば教えてあげるだけ」というものとして位置づけられている。そのため、こうした思いをもっているアイヌの人々の技術を周囲の人々がどのように受け

継いでいくのかが重要になる。

(肯定的／消極的)

- 今まで通りアイヌであることは意識して守っていくが、だからといってアイヌとしての生活を送るつもりはない。一般的には仕事をして生活をしているからアイヌとして生活はできない。
(老年層・男性)

アイヌであることは意識しているものの、アイヌとは直接的に関係のない一般的な仕事をしている状況では、「アイヌとしての生活はできない」と考えている。つまり、アイヌとしての生活を送るということは、アイヌであることに関わる活動を何等かの生業とすることであると捉えているとみられる。

(無意識／消極的)

- たとえば私達みたいな普通に8時間勤務をしていてもそういう、アイヌ民族の教育とかそういう時には4時間ぬけて、それは完全に保証される、そういう制度が無い限り、絶対（アイヌ文化の）継続はできない。（壮年層・女性）
- アイヌということはこれまでと同じように意識しないで生活していく。（老年層・女性）
- 自分にアイヌの血が入っていることはわかっているが、ただそれだけのこと。（老年層・女性）

(その他)

- アイヌとして生きるといつても、アイヌの物を作り生活が成り立つのならするかもしれないがむずかしい。阿寒には部落があり、平取もアイヌのことに関わって生活している人が多い。結果的にアイヌのことに関わって生活できるのならそれでいいけれど、旭川にはそういうことがない。周りを見ると旭川が一番同化しているように思う。「アイヌとして生きます」と言つてもどうやって生きて行くのという感じになる。（老年層・男性）

今後の生活について「アイヌであることは意識せず、アイヌとしての生活を送るつもりはない」という気持ちがもっとも近いという人々や「その他」の意識をもつ人には、先の（肯定的／消極的）である者と同様に、アイヌとしての活動が生業にはならないからアイヌとしては生きられないという立場と、自分がアイヌであることは「意識しない」「ただそれだけのこと」という立場があった。こうしたスタンスはアイヌであることに（無意識／消極的）であったとしても、大きな違いがあると考えられる。すなわち、アイヌ民族として教育活動などをおこなっていきたくても、それがまったくの無償であるならば、生活が成り立たないため、こうした活動に参画できないという思いがある場合と、もし条件が整ったとしてもこうした取り組みには参画する志向がない場合がありうる。老年層である場合は実際にはこうした活動は困難をともなうものであるが、壮年層にとっては、具体的に経済的な対価や保障を得られる「仕事」になるかどうかということが、アイヌ文化の活動への参画を左右する状況になっている。

旭川では歴史的に木彫りを生業にすることによって、生活を成り立たせてきたアイヌの人々も

多い。こうした経緯をふまえると、アイヌ文化に携わることが収入面で生活にプラスの影響をもたらすことが、共同体としてアイヌ文化を継承していくことにつながるのではないだろうか。一方で対価をともなわないアイヌ文化活動に人々が取り組むことを、保存会や協議会、協会がアイヌの人々の共同体として支援することは、子どもや若者など次世代のアイヌの人々のエスニック・アイデンティティの醸成に影響を及ぼすものになると考えられる。

まとめにかえて

本章では、旭川市におけるアイヌの人々のエスニック・アイデンティティを検討してきた。まず、本調査における限界を指摘しておかねばならない。エスニック・アイデンティティを検討する際、これまで道内他地域（札幌市、むかわ町、新ひだか町、伊達市、白糠町、帶広市）で実施してきた調査結果と比較するため、本研究においても、過去—現在—今後（未来）において、アイヌであることについてもっている意識を「肯定的」「否定的」「どちらでもない」のいずれであると捉えているのか、という枠組みを用いて検討してきた。しかし、旭川においては、過去においても現在においても「否定的」な意識をもっている人はほとんどみられなかつたため、意識の変容を捉えるということが難しいという状況にあった。一方で全般的には「肯定的」な意識の人々を対象にすることことができた調査であると捉えることもできる。こうした本調査の前提をふまえ、今回のインタビューの結果から示唆されることは次の4点である。

第1に、刺繡や踊りといったアイヌ文化の活動はアイヌ文化の継承であるとともに、経済的な対価をともなうものとして位置づけられているということである。アイヌの伝統文化を行うアイヌとして生きることは、その生き方が収入としてプラスに反映される場合のみ、その活動が可能であると少なからぬ人々が考えていた。一般的な就労をしている人々の中には、仕事を休んでアイヌ文化活動に関わるのであれば、休んだ分の収入保障がなければアイヌ文化活動に携わることは難しいと考えている者もいた。旭川においてはアイヌの人々の生業として木彫りやアイヌ刺繡が位置づけられてきたという経緯から、こうした考え方をもつ人々が一定数存在することは首肯できるものである。

第2に、他地域ではエスニック・アイデンティティをともなわないアイヌ文化の肯定化も進行していると見られていたが、旭川ではアイヌ伝統文化が重要なものであり、活動に参加したり継承したりするべきものであるという認識をもつ人々は、肯定的なエスニック・アイデンティティをも有しているということである。つまり、アイヌ文化とエスニック・アイデンティティが切り離されていない。しかも和人配偶者がアイヌ文化の担い手となっている状況もみられた。ただし、本調査の協力者の特性としてこうした特徴を理解しておかなければならぬ、ということかもしれない。

このことに関連して、第3に、他地域ではエスニック・アイデンティティの存在以前に、アイヌ文化活動への参加の機会や興味がない人々や、親世代から告知されていないために自身がアイヌの血筋であることを知らない人々が存在しており、エスニック・アイデンティティの無意識化が顕著であったが、旭川ではそういう事例はみられなかった。

第4に「純血性」がエスニック・アイデンティティに与える影響についてはほとんど語られなかった。「血が薄い」「濃い」ということは、これまでの研究では、「血が薄い」ことは、アイ

ヌとして積極的に生きる必要性を感じない「無意識化」の要素になっていることが示唆されてきたが（新藤こずえ 2018）、本調査ではこうした語りはみられなかった。ただし、今回の調査協力者の多くがアイヌであることを肯定的に捉えているために調査協力が得られたという側面を見逃すわけにはいかない。一方で、多くのアイヌの出自の人々が沈黙しているという、石原（2018）が指摘する「サイレント・アイヌ」（自身がアイヌであることを表に出さない人々）の存在やこうした人々の意識は、本調査からは見出すことはできない。「自ら語るアイヌ出自のものが増加しない理由の一つは、自分たちの歴史を失い、自己の存在について語る言葉がないこと」（石原 2018）という指摘は重い。

「アンケートやインタビューで表明されたエスニック・アイデンティティは、現代を生きる様々な背景や経験を経たアイヌの人々が、表出してもよいと戦略的に判断した表層にあたる部分にすぎない」（新藤こずえ 2018）という状況に対して、もはや大多数のアイヌの人々が「サイレント・アイヌ」となっているという事実について、われわれはどのように考えるのかを突き付けられている。

注

- 1) こうした問題を指摘したものとして大内（2015）など。

参考文献

- 石原真衣, 2018, 「沈黙を問う：「サイレント・アイヌ」というもうひとつの先住民問題」『北方人文研究』11,3-21.
 大内裕和, 2015, 「日本の奨学金問題」『教育社会学研究』96,69-86.
 小内透・長田直美, 2012, 「アイヌとしてのアイデンティティの形成と変容」小内透編著『現代アイヌの生活の歩みと意識の変容－2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書－』北海道大学アイヌ・先住民研究センター,169-81.
 新藤慶, 2018, 「帯広市におけるアイヌ民族のアイデンティティ・ポリティクス」『帯広市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学アイヌ・先住民研究センター,93-128.
 新藤こずえ, 2013, 「エスニック・アイデンティティの諸相」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書30 新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 51-67.
 ———, 2014, 「アイヌとしての意識とアイヌ文化の経験」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書31 伊達市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 42-61.
 ———, 2015, 「エスニック・アイデンティティとアイヌ文化の経験」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書33 白糠町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 99-124.
 ———, 2016, 「エスニック・アイデンティティの形成と変容」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書35 先住民族多住地域の社会学的研究』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 97-116.
 ———, 2018, 「現代アイヌのエスニック・アイデンティティ」『現代アイヌの生活と地域住民－札幌市・むかわ町・新ひだか町・伊達町・白糠町を対象にして』（先住民の社会学第2巻）東信堂, 133-63.
 上山浩次郎, 2012, 「エスニックな社会運動への参加と意識－アイヌ協会がもつ生活上の意味」小内透編著『現代アイヌの生活の歩みと意識の変容－2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書－』北海道大学アイヌ・先住民研究センター,183-93.

(新藤こずえ)